

## 辺野古基地移設反対運動の現場を訪れて

### 1. はじめに

私がこの辺野古基地移設反対運動に関心を抱いたきっかけは、3年ほど前に SNS で観た動画だった。その映像には、米軍基地建設反対を訴える高齢者の人々が、次々と機動隊に排除されている様子が映っていた。一般市民は何ら暴力を振るっていないにもかかわらず、機動隊が力尽くでその場を制圧しようとしていたのだ。私は日本国内で生じている出来事とは思えず、非常にショックを受けた。また、なぜ彼らは体を張ってまでもこの運動を続けているのだろうという疑問も生じた。この出来事がきっかけで、書籍や映画、ドキュメンタリー映像などを用いて、沖縄の歴史や辺野古基地移設問題について調べ、沢山のことを学んだ。そこには、私が今まで知らなかった沖縄の壮絶な闘いが記されていた。琉球王国の時代から現在に至るまで本土から虐げられ続け、幾度もの苦難を乗り越えてきた沖縄の歴史を学んだ。この学びを経て、沖縄の問題は日本に住む私たち全員の問題でもあるのだと感じ、沖縄のために何ができるのだろうと考えるようになった。また一度反対運動の現場を訪れることで、その答えの手がかりを得たいと思うようになった。コロナ禍の影響で一度断念したものの、今回状況が落ち着いたのを機に、国内研修を利用して訪問することを決めた。

### 2. 概要

研修期間は 11 月 9 日（水）から 12 日（土）で、9 日（水）は移動日、10 日（木）と 11 日（金）の両日に辺野古ゲート前の座り込み運動に赴いた。座り込み運動は、基地建設の埋め立てに使用される土砂を積んだトラックが、辺野古のゲートに搬入する際に行われている。搬入は基本平日の 9 時、12 時、15 時の三回で、そのおよそ 20 分前から座り込み運動が行われる。私は那覇市内を 9 時に出発する、辺野古行きの貸切バスで移動した。このバスは、辺野古基地反対を訴える沖縄平和市民連絡会を中心に、カンパを募りながら運行されている。このバスの運行上の関係から、両日ともに 12 時と 15 時の回に参加した。また 12 日（土）は、ひめゆり記念資料館と平和記念資料館に赴き、改めて沖縄戦を中心に、沖縄の歴史に触れる学びの時間をとった。

### 3. 座り込み運動の現場を視察して

私は両日ともに辺野古貸切バスを利用し、那覇市から現地へと向かった。10日は私を含め3人しか乗車しなかったが、11日は11人もの人が那覇市近郊から乗車した。行く道中では、県内で行われた基地問題に関する講習会に参加した人が情報共有を行ったり、歌を練習したり、お菓子を分け合ったりと、終始賑やかな雰囲気だった。

座り込み運動の前後は辺野古テント村で待機しているため、バスはテント村に向かった。到着すると、そこには9時の座り込み運動に参加した人たちの姿があった。議員や沖縄県内各地から参加している人たちが演説をし、軍事費増強の問題やPFAS汚染といった基地に関する問題について情報共有をしていた。また、沖縄に関する情報が書かれた手作りのビラを配る人たちも多くいた。私も参加した二日間で、たくさんのビラや冊子を頂き、沖縄に関する様々な問題について詳細に知ることができた。このように、辺野古テント村は運動の待機場所としてだけでなく、情報を共有して意見を交わす場にもなっていた。



↑テント村の様子(2022年11月10日)



↑テント村前の看板(2022年11月10日)

トラックが来る20分前になると、参加者たちがテント村からゲート前に移動する。用意されている折りたたみ椅子とプラカードを各自が持ち、ゲート前に並んで座る。ゲート前には既に警備員が横一列に整列していて、緊張感が漂っていた。座り込みが完了すると、運動の代表者が数名前に出てきて、沖縄民謡や辺野古への思いを綴った替え歌を歌い始め、参加者も一緒に歌った。歌には平和への想い、大切な沖縄の海を守りたいという想い、座り込みに対する想いを綴ったものが多かった。演説ではなく、歌というかたちで意思表示をすることによって、参加者たちの連帯感を高めるだけでなく、より感情がダイレクトに伝わってきた。歌を歌い始めると、土砂を積んだトラックが長い列をなしてやって来た。トラックは参加者たちが座り込んでいるためゲートを通すことができず、立ち往生した。すると今度はサングラスとマスクを着用した、十人以上もの沖縄県警の機動隊が立ち退きを求めてきた。しかし参加者たちは

## 国内研修レポート

なおも歌い続け、機動隊の声は歌でかき消されていた。すると今度は強制排除の号令とともに、機動隊員が参加者たちに詰め寄り、立ってこの場から去るよう指示をしてきた。サングラスとマスクで彼らの表情がわからず恐怖を抱いたが、コロナ対策でなるべく接触を避けていたこともあり、身体的接触はほとんどなかった。



↑ゲート前で座り込みをしている様子（2022年11月11日）

参加者全員が立ち退くと、数え切れないほど多くのトラックがゲートに入っていった。土砂を積んでいるものもあれば、生コンを積んでいるトラックもいた。夥しい量の土砂や生コンが平日三回も海に運ばれていることを知った。何十台ものトラックがゲートを通過する様子を、参加者は辺野古基地反対が書かれたプレート掲げながら道路脇から見送った。全部のトラックが搬入を終えると、ゲート前で参加者全員がシュプレヒコールをし、1回の運動が終了する。



↑土砂を積んだトラックを見送る参加者（2022年11月10日）

12時の座り込み運動が終了すると、参加者はテント村に戻り昼食休憩をとった。ここで9時

と 12 時の二回の運動に参加した人たちは、皆帰宅していった。ご高齢の方が多く、中には足を引きずっている人もおり、丸一日参加することは体力的にも厳しいのだそうだ。私は 15 時の運動までの休憩の間、参加者の方から様々なお話を伺った。10 日は、現在の辺野古基地建設までに至る経緯を熱心に教えてくださった方がいた。11 日は皆で持ち寄った料理や飲み物を分け合ったり、歌の練習をしたりと、終始和やかな雰囲気ではあったが、真剣にこの問題に向き合う人たちが集まっていた。

お話を伺った際に印象に残ったことは、まず参加者が皆沖縄の情勢や日本の政治について豊富な知識を持ち合わせていることだった。辺野古基地建設によって生物多様性が失われること、莫大な規模の税金がかかるだけでなく建設期間も後何十年もかかる上に危険な場所であること、米軍基地が存在することによって日常生活が脅かされることなど、住民だからこそ体感する脅威だけでなく、専門的な知識も豊富だった。それだけ参加者たちは他の誰よりも真剣かつ熱心に、この問題に向き合い、考え学び、行動しているのだと感じた。

また辺野古基地反対を選挙や住民投票、裁判などで民意を示しているにもかかわらず工事が進んでいることへの怒りの感情、沖縄には民主主義がないのだという悲痛の声もあった。あらゆる手段を講じても県民の声は受け入れられないため、ゲート前で座り込みをするしかないのだ。ただゲート前での座り込みは工事を止めることはできず、遅らせることしかできない。だがそれでも声を上げ続けるのだという強い意志も見られた。そして美しい海を守りたい、戦争をさせたくない、沖縄の暮らしを守りたいという願いを持って、この運動に臨んでいた。

12 日はひめゆり記念資料館と平和記念資料館を訪れた。沖縄戦の悲惨さを改めて痛感し、運動参加者の二度と戦争をさせないという思いに強い共感を抱いた。また沖縄の歴史を振り返ると、数々の苦難を県民が一致団結して乗り越えてきた過去がある。だからこそ、不屈の精神を持って辺野古基地反対運動を続けられるのだと感じた。同時に、いつまで沖縄の人々に負担を強いているのだらうと考えさせられた。

#### 4. 研修を振り返って

現場を実際に訪れることの重要性を、改めて痛感した。座り込み運動は、私が想像していたよりも遙かに精神的にも肉体的にも辛いものだった。特に土砂を積んだトラックが次々と搬入されていく光景を見たときは、自分の無力感と海を汚すことに対する罪悪感でいっぱいになった。この辛い運動を、参加者たちは交代交代で連日行い続けていることに、尊敬の念を覚える。ただ参加者の方々から、運動が下火になりつつあり本土からの参加者が年々減少していること

に対する不安や、本土の人たちも一緒に怒って世論を形成してほしい、若い人たちにも関心を持ってほしいという想いを多く聞いた。

研修を終え、一人でも多くの人が実際にこの辺野古基地移設反対運動の現場に訪れてほしいと思った。運動に参加しているおばあやおじいの話聞き、現場の様子を見れば、彼らの想いを少しでも理解することができるからだ。そして、この問題は他人事ではなくなるだろう。沖縄から帰ってきた私も、今日も誰かがゲート前にいるのだと思いを馳せ、沖縄のことを考えるようになった。今後も沖縄で見てきたことを忘れず、時間を作ってまた辺野古を訪れたい。そして見てきた景色を身近な人に話し、少しでも関心を持ってもらいたいと思う。それが今私にできることだと考える。